

恩恵と伝承

4 蛙子池と肥土山農村歌舞伎



佐々木 育夫
SASAKI Ikuo

肥土山農村歌舞伎保存会
会長

肥土山農村歌舞伎は蛙子池が完成して、ため池の水が神社の側溝まで流れてきたのを村人たちが歓喜し、祝いの歌舞伎をしたのが始まりと言われている。江戸時代から育んだ文化や慣習を、300年以上も継承している肥土山農村歌舞伎とは。

肥土山農村歌舞伎の始まり

小豆島は壺井栄の小説『二十四の瞳』で全国的によく知られている。最近ではテレビや映画でよく取り上げられるようになり、ますます有名になっている。瀬戸内海の東部に位置し、淡路島に次いで二番目に大きな島で、周囲は約141km、人口約3万人あまりの大変風光明媚なところである。ただ、小豆島がある香川県は瀬戸内海式気候のため年間雨量は全国で一番少ない。しかも島全体が急峻で、雨が降ってもすぐに海へ流れてしまい、昔から農民たちは干ばつに悩まされてきた。

とよしま 小豆島 肥土山地区は島の中西部に位置し、約300年続いている農村歌舞伎で有名な農村地帯である。この肥土山の奥には蛙子池があり、今も肥土山のみならず、瀨崎や上庄地区を豊かに潤している。この蛙子池と肥土山農村歌舞伎とは深い関係があ



写真1 蛙子池

る。それは、今から約300年前に蛙子池が完成した時、池の水が肥土山離宮八幡神社の側溝まで流れてきたのを村人たちが歓喜し、それを祝って神社の境内に仮小屋を建てて歌舞伎を奉納したのが肥土山農村歌舞伎の始まりと言われている。

蛙子池を作った太田伊左衛門典徳

蛙子池の築造では、太田伊左衛門典徳を抜きに語ることはできない。彼がいたからこそ、完成させることができたのである。当時、肥土山で庄屋をしていた典徳は、毎年、農民たちが水不足で苦しんでいる様子に心を痛めていた。水が原因で農民同士がいさかいを起こすことも多々あった。そんな様子を目の当たりにして、これをなんとか解決したいという思いが強くなった。そのためには大きなため池を作ることが必要だと考えた。

早速、候補地を探して山の奥を歩き廻るが、なかなか適当な候補地は見つからない。そして最後にやっと絶好の候補地を見つけた。そこは、現在景勝地となっている銚子溪のさらに奥で、自然の水たまり場ができていた。たくさんの蛙が住んでいて、池の名前の由来はここから来たと言われている。しかし当時、池を作る場所が見つかったといっても、すぐに築造に取りかかるものではなかった。築造を始めるためには、幕府の許可が必要であった。そこで典徳は、そのため池の恩恵を受けるようになる瀨崎と上庄地区の庄屋ともよく話し合い、天和3(1683)年に「作恐申上ル訴状」を、小豆島を支配していた岡山の倉敷代官所に、3地区の代表たちの連名で提出した。なか

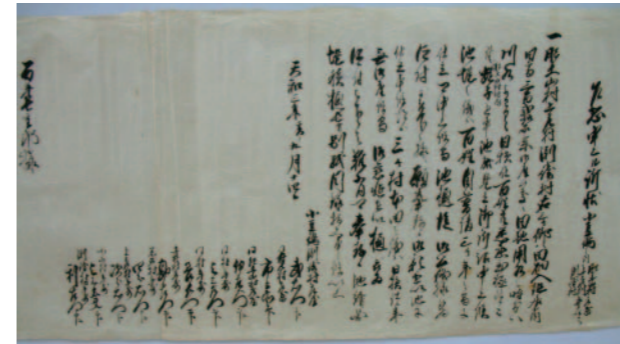


写真2 「作恐申上ル訴状」

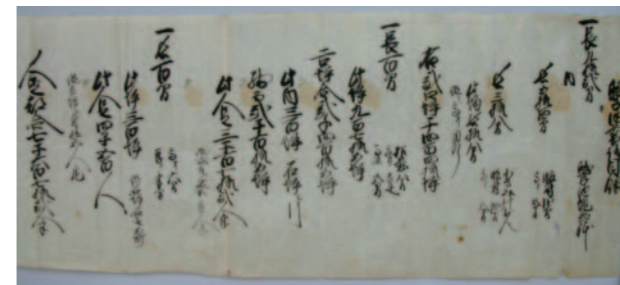


写真3 「蛙子池普請目録」

か許可がおりなかったが、そのあまりの熱心さに倉敷代官所もうたれ、翌年やっと築造の許可がおりた。

艱難辛苦の末の完成

貞享元(1684)年、蛙子池の受益農家の農民たちは意気揚々と築造に取りかかった。ところが、この池は肥土山から約3km、瀨崎地区から約6kmと遠く離れていたことや過酷な作業のため、農民たちはだんだん脱落していった。それを引き止めるためには多額の人夫賃が必要であった。典徳は田地田畑や家財はもちろん、家業の酒造りの株も手放してその資金を作った。ため池築造に懸けた典徳は、後に蛙子池に仮小屋を作ってそこに住んだと言われている。



写真4 典徳の墓

ところが、工事の途中で台風に見舞われ、折角作った土手が決壊した。この洪水のため、水田が流されてしまった農民もでてきた。彼らは典徳に対する不満がだんだん募り、ののしる者さえでてきた。それでも典徳はくじけず、改修に取りかかった。こうした艱難辛苦の末、工事開始から3年目の貞享3(1686)年春、ついに蛙子池が完成し、その池の水が、肥土山、瀨崎、上庄地区の水田を潤すようになった。完成当時は、土手の長さ174.5m、高さ8.4m、貯水量約7万tであった。しかし、その貯水量では十分ではなかったので、その後、何度か拡張工事がなされ、現在の蛙子池ができあがった。現在の蛙子池は、土手の長さ420m、高さ15.3m、貯水量63.4万t、灌漑面積124.0haである。

村人たちが、厳しい条件を克服して蛙子池を完成させることができたのは、不屈の精神と自己犠牲もいとわぬ典徳がいたおかげと感謝して、典徳の死後、肥土山離宮八幡神社に豊水分霊神社として奉った。

約300年の歴史と伝統を持つ肥土山農村歌舞伎

蛙子池の築造が行われた頃、村人の一番の娯楽は歌舞伎を見ることだった。当時、島の人たちは一生に一度、伊勢参りに行くのが夢だった。その帰途、上方に立ち寄って、歌舞伎などの芸能を見るのがこの上ない楽しみだったと言われている。島に帰っても、その楽しかった歌舞伎のことが忘れられず、上方の歌舞伎役者を島に呼んで歌舞伎を楽しむようになる。そのうちに見るだけでは飽き足らなくなり、自分たちでも実際に歌舞伎を演ずるようになった。ちょうどそんな時に蛙子池が完成し、その水が肥土山離宮八幡の横に流れてきたものだから、村人たちは境内に仮小屋を建てて盛大に歌舞伎を開催して喜び、楽



写真5 典徳を奉った豊水分霊神社

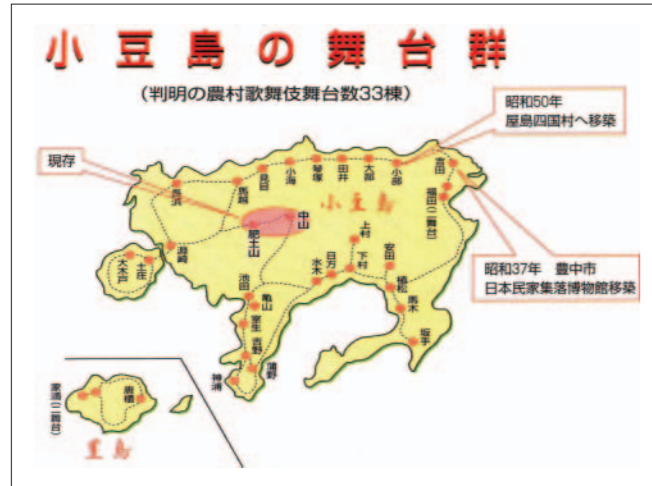


図1 小豆島にあった歌舞伎舞台

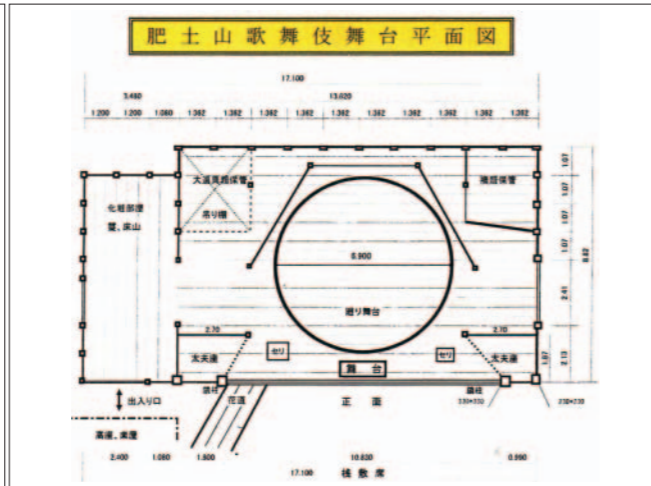


図2 肥土山歌舞伎舞台平面図

しんだ。その後、毎年上演されるようになり、今日まで永々と続いてきたのである。

当時は島の各地で舞台が作られ、歌舞伎が上演されていたと言われる。多い時には33もの舞台があって、歌舞伎が上演されていた。だんだん時代の移り変わりとともに廃れてきて、現在では、肥土山農村歌舞伎舞台と中山農村歌舞伎舞台の二つだけとなくなってしまった。

毎年、歌舞伎が上演される肥土山の歌舞伎舞台は国の重要有形民俗文化財に指定されている。棧敷席はなだらかなスロープを生かして歌舞伎を見るのに最高の観客席を形作り、堂々たる野外劇場といえる。また、舞台から向かって真正面にはいろいろな神々が鎮座しており、5月3日の奉納歌舞伎では神々にも歌舞伎を楽しんでもらうという趣向になっている。これは、歌舞伎上演に対する江戸幕府の締め付けが厳しく、神社への奉納という形をとれば幕府も口出しができなかったためだと言われている。さらに高座、化粧室、衣装倉も完備しており、今日でも有効に活用されている。

その衣裳倉の中には、現在、約1,100点の歌舞伎衣裳が保管されている。それらの衣裳の多くは村人たちが厄年などの記念に寄贈した物が大半である。それも300年近く続いており、江戸時代に寄贈された衣裳もたくさんあり、現在でも奉納歌舞伎の時に立派に使われている。かつらは約60点、歌舞伎の根本(台本)は約400点保存されており、ハードの面では大変充実している。



写真6 5月3日の肥土山農村歌舞伎本番

全て肥土山の住民の手で行われる歌舞伎

それでは、毎年、どのようにして奉納歌舞伎を上演しているのか紹介したい。

肥土山地区全体で戸数は約270軒あり約730人が住んでいる。地区には大小6つの小地区があり、この地区が輪番制で奉納歌舞伎を運営している。奉納歌舞伎の運営というのは期間も長く、気も遣い、たくさんのお金もかかるので負担が非常に大きい。これを毎年となると続かない。それを輪番制にして6年に一度の当番にしたのは、歌舞伎を続けるために先人が編み出した知恵だろう。

毎年、年が明けるとその年の当番組は早速組織作りから始める。まず、責任者である大世話人を決める。その後、会計などいろいろな役職の人を決める。こうして組織ができると、2月には演目と出演者を順次決めていく。3月中旬には「練り固め」という行事を行う。これは「地獄めし」とも言われ、これに参加する



写真7 割盒弁当



写真8 棧敷席のスロープと舞台向かいの神社



写真9 衣装倉

と奉納歌舞伎が終わるまでは、途中で抜け出すことは許されないということである。現在の結団式のようなものである。これが終わると本格的に連日練習が始まる。昨年、歌舞伎の稽古場や化粧室などが完備したアクティブ大鐸という施設が完成し、練習にも一層熱が入っている。この練習の間、当番組は出演者、太夫、三味線奏者などにお茶などの接待を毎晩しなければならない。同時に当番組の一番大きな仕事は、奉納歌舞伎開催のための資金集めである。開催のためにはかなりの費用を必要とするので、町内だけでなく、島内にも御花のお願いにまわり資金集めをしなければいけない。

こうして4月末頃までには歌舞伎を仕上げ、毎年、4月29日にリハーサルを実施し、5月3日に本番を迎えるわけである。ここで最後にいつも大きな問題になるのが当日の天気である。野外劇場なので雨が降れば上演はむずかしい。その時は翌日に延期をしている。

例年上演している幕数は4幕で、最初に『三番叟』を上演し、その次に子ども歌舞伎を上演している。三番目が当番組の青年が中心になって青年歌舞伎を上演し、最後に保存会のメンバーが切り狂言を上演している。幕間が結構長く、幕間には子どもたちや娘さんの舞踊などを披露して楽しめるようになっている。よく上演する演目は本歌舞伎でも人気のある『仮名手本忠臣蔵』『菅原伝授手習鏡』『義経千本桜』である。上演にあたっては、役者をはじめ太夫や三味線奏者など、全て肥土山に住む住民の手で行われることが大きな特色といえよう。

江戸の風情を伝える

奉納歌舞伎当日は、棧敷席もまるで江戸時代にタイムスリップしたような雰囲気に包まれる。棧敷席ではただ歌舞伎を見るだけでなく、これも昔ながらの

割盒弁当を持参して、それを家族や都会から帰省した人、親戚の人たちが囲み、その弁当を食べたり、お酒を飲みながら歌舞伎を見物する。だから、歌舞伎を上演中も棧敷席はたいへん賑やかである。また、歌舞伎には親しい人や隣近所の人も出演するので、温かい応援が飛び交い、和やかな雰囲気の中で歌舞伎が行われる。きっと、江戸時代の昔からこのような雰囲気の中で行われて来たのではないかと思っている。

奉納歌舞伎が終わると「どうやぶつ」という行事を行う。これは今でいうと「打ち上げ」である。これでやっと奉納歌舞伎から解放されるということになる。このような「練り固め」や「どうやぶつ」という行事も江戸時代から永々と受け継がれて来た行事ではないかと思う。ぜひ、歌舞伎だけでなくこうしたものも後世に残していきたいものだ。当時の蛙子池築造の苦勞に思いを馳せながら、肥土山独特の歌舞伎運営の仕方や奉納歌舞伎当日の風情なども、ぜひ大切にしたいと思っている。



写真10 蛙子池